

---

# デシヴィアの檻

中雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デシヴィアの檻

### 【Nコード】

N7179Z

### 【作者名】

中雅

### 【あらすじ】

狭い王国で学生として暮らしていた少年と少女が、素術と呼ばれる魔法を操る世界に足を踏み入れる。

現れた化け物は何なのか、二人は無事に国へ帰ることができるのか？

ファンタジー冒険もの、基本シリアスです。

## 悪魔の遺物 前編

彼らが《何》であるか、識ることもなく、伝えることもないだろう。ただ、彼らの存在意義が、我々の其れと反するということだけは、確かなのだから。

【ティルゲンの神話―終わりの章より―】

「目標の様子はどつだ？」

若い騎士が、見張りをしていた兵士に声をかける。筒状の望遠鏡を覗いていた兵士は、首を横に振って、望遠鏡を騎士に手渡した。

「今のところ、動きはありません」

騎士は望遠鏡を覗き込んだ。昨晚から振り続ける忌々しい雨と立ち込める霧で、視界はこの上なく悪い。雨で体力を奪われないように、兵士たちは全員、フード付きのマントを着込んでいるが、それでもこの独特の湿気で気力を削がれているのは確かだ。

待機して三日目。雨による追い打ちで、見張りをしている兵士の疲労も色濃い。それは、若き騎士も同じだったが、シュナプス侯爵

から騎士の称号を授かっている以上、兵士たちにそんな弱音は見せられなかった。隊を預かる自分の士気は、兵士の気力に大きな影響を及ぼす。いくら兵が優秀でも、指揮官が弱腰なら勝てる戦にも負けるものだ。

シユナプス領騎士団の一小隊が待機する丘を下ると、草原の奥に鬱蒼とした森が広がり、この雨と相まって不気味な雰囲気を醸し出している。全身を赤色の鎧で身を固めた一団は、視界のよい、開けた丘の上に待機していた。一団と言っても、騎士一人に兵士三十名という少数精鋭。これが本格的な戦争なら有り得ない編成だが、そもそも相手は得体の知れないもので、これで少ないのか多いのかすら判断ができない状況だった。

ノイトラール侯国が表面上の平和を保っているとはいえ、表面下の緊張は依然として続いている。何よりも、このシユナプス領は《悪魔》が住むと言われる《闇の森》に面していて、兵力の増強に力を入れざるを得ない。だが、兵力の増強は均衡した関係を壊すと、侯爵たちからの干渉があり、思うようにいかないのが現状だった。あの悪魔たちが攻め入るとしたら、森を領土としているシユナプス領に違いなく、保身を考える他領の侯爵たちが、ここを生贄代わりに考えていることは明白だ。そんな考えが読めるからこそ、シユナプス侯爵は他侯爵との折り合いが悪く、ノイトラール侯国での立場がどんどん悪くなっている。

そんな緊迫した状況の中、かの悪魔が住む森から突然現れた謎の生き物。とりあえず様子見として派遣されたはいいが、相手がどれ位の力を持つかも分からない。若き騎士も、自然と憂慮の溜息が出てしまう。

「悪魔め……とうとう本性を現したか」

若き騎士は唸るように言い、望遠鏡を下ろして、眼下に広がる森を睨む。森から出て来た《あれ》が、悪魔の配下だと思わない方が

無理な話だ。

森の前に広がる平原に、一つだけ異様な光景があった。

その一部だけが、景色を切り抜いたかのように灰色。中央に座するのは、人の形を取った灰の塊。雨に打たれ、溶けるでもなく、ただその表面を濡らしている。あれを灰と呼ぶのは間違っているかも知れない。ただの灰であれば、雨が降りしきる中で原型を留めてはいないだろう。だが、他に形容するものがないことも確かだ。今までに見たこともない物体、それこそ《悪魔》と呼ぶに相応しい気がする。その足元に広がる緑の絨毯も、進んできたであろう足跡だけがぼつかりと灰色に彩られ、奇妙な痕跡を残している。

「言うでない、ラテルネ。今まで、何もなかったことが奇跡みたいなものじゃ。斯様な有事のために、儂らがある。……勿論、騎士が暇であるならば、それに越したことはないがお」

老年の騎士が、燃えるような緋色の髭を撫でながら、その巨体を揺らして笑った。若き騎士、ラテルネ・メッサーは没面で振り返る。

「ザハト様……」

今回の派遣は、異例の若さで騎士称号を得たラテルネへの、遠まわしな嫌がらせも含まれている。いくら正体不明の化け物とはいえ、その背後に控える悪魔の存在を考慮すれば、騎士一人に任される小隊では、余りにも兵力が足りない。しかし、ようやく騎士の末席に加えられたばかりのラテルネに発言権などなく、議題は押し切られるままに終わった。仮に、このまま悪魔たちとの戦争になれば、危機に陥るのはシュナプス領である。騎士とは、領民を、領主を、領土を守るために存在し、それに殉じなければならぬ。下らないプライドを競うために騎士になったのではないと、ラテルネは日ごろから遣り切れない思いを抱えていた。

「まんまと厄介な役回りを押し付けられよつて。おぬしの実直さは好感が持てるが、損な性格よの。もう少し世渡りも上手くやらんなな」

遠慮のない力加減で背中を叩かれ、ラテルネは軽く咳き込んだ。

老年の騎士は、ラテルネが一小队を任せられ、得体の知れない化け物の見張りを任せられた経緯など、全てお見通しのようだ。既に現役を退いたとはいえ、かつてシュナプス領騎士団の団長を務めた、ザハト・リーゼ。老いてなお鎧を脱がず、指南役として騎士団に残っている。そのザハトが同行しているのは、ラテルネにとって唯一の光明だった。

しかし、ラテルネの不遇を哀れんではいけないだろう。ザハトは何かの先見を持って、同行を申し出たに違いない。若き日に鍛え上げたその巨体に相応しく、ザハトは大らかで深い懐の持ち主ではあるが、それだけでは、長い平和に蝕まれ、権力を競うことしかやることのなくなった、名ばかりの騎士団の隊長を長く務めることは不可能だ。人心を、時勢を読む確かな眼があり、よつて、領主であるシュナプス侯爵の信頼も厚い。

「何事もなければ 確かに、それがよいのでしょうか。しかし私はこの一件が、シュナプスの今後を左右するという可能性を捨て切れません」

「ふむ。なればこそ、文句の一つも言わず、兵を率いた……と？」

「はい」

ラテルネの強い眼差しを受け、ザハトは目を細め、髭を撫で付ける手を止める。

「……杞憂で終わればよいな」

呟いたザハトの表情は、険しいままだ。

「ザハト様、やはり何か……」

「おぬしも、寝物語に聞いたことがあるだろう。……シユルスの話話を」

「……はい、ノイトラールで知らないものはおりません」

突然の話題に戸惑いながら、それでもラテルネは神妙に頷く。

ノイトラール候国に、はるか昔から伝わる物語。かつて大陸を脅かした悪魔と、それを退けた神々の叙情詩は、今でも人々に語り継がれ、広く知れ渡っている。今、この大陸に既に神は存在せず、信仰の中に残るのみだ。

「まさか……神話が、あれが実際にあつた出来事であるか?」

「……バルバライは、確かに《悪魔》と呼ばれてはおるがの。だが、ここ数百年、奴らは森に閉じ籠り、明るみに出たことはない。文献に伝わる奴らは、儂らと同様に原素の一つ、闇を司る一族。少なくとも……今、儂らの目の前におる《あれ》ではなかるうよ」

「しかし、奴らが生み出したものと考えれば……!」

「無から有を生み出すなぞ、それこそ神の領域じゃわい」

おどけた口調で言いながらも、遠目に見える灰色の塊に向けるザハトの眼差しは、鋭い。

「……悪魔、か」

神話の中の《悪魔》は、強大な力を操り、人々を恐怖と混乱の渦に陥れ、神々によって封じられた。神々は封印のために力を使い果たし、滅んだとされる。闇を司るバルバライが《悪魔》と呼ばれた

のは、当然のことかも知れない。人は本能的に闇を恐れる。その闇に対抗できるのは光で、だからこそ、光を司るロイヒテは、自分たちを神の子孫と信じて止まない。それに次ぐのは火とされ、火の一族であるシュナプスが、《闇の森》を監視下に置いている。

古い言葉で《終わり》を意味する、シュルスの神話を鵜呑みにするものは少ない。しかし、その痕跡は大陸に数多く存在する。真実ではないが、事実を物語として昇華したものという結論は、五つの異なる種族が集うノイトラール侯国で、唯一共有する見解だ。シュルスの神話については、ノイトラールに生息する種族の中でも最長の寿命と知識を誇る樹の一族、ラウプが詳しいとされるが、彼らは、木々を資源とし、無意味に伐採、開拓を続けてきた他の種族を嫌っている。国の概念を持たず、争いによる自然の破壊を避け、中立を保ってはいるが、好んで協力はしないという立場を貫いている。

人は死して原素に還る。光は光へ、闇は闇へ、火は火へと。しかし、ラウプに死の概念はなく、生きたまま樹へと変貌するため、木々は文字通り彼らの仲間だ。それを自分たちの都合で利用しているのだから、彼らの態度は当然だろう。

ノイトラールは、九つの原素に支配され、原素によって成り立っている。人も例外ではない。だからこそ、現れた化け物の正体が不明なのだ。目の前の化け物は、一見、灰の塊のように見えるが、それは決して《火》の属性ではない。火を司る一族、更にその中の、素術を扱うことのできる騎士ならば、それが火の原素を持ち合わせていないと一目で分かる。そもそも、あの化け物が原素を宿しているのかすら疑問だ。だが、原素を宿さない生命など、見たことも聞いたこともない。或いは、今まで解明されていないだけで、十番目の原素が存在するのか。



## 悪魔の遺物 後編

「ようやく雨が上がるようじゃぞ。この歳になると、雨が降るだけで身体のおちこちが痛んでなあ……やれやれ」

ザハトが深い溜め息を漏らす。ただでさえ、シュナプスは水に弱い。本来なら、雨が降れば外出も控える一族だ。

闇の森が位置する南の方角が、薄明かりを射し始めている。ノイトラール大陸の南部は、元は広大な草原に覆われていた。シュナプスは長くこの草原を支配し、放牧と農業の栄える国だった。しかし、その荒廃は年々酷くなり、美しかった草原は見る影もない。シュナプス侯爵の城があり、領土の中心地であるエルンテの街付近は、荒野と砂漠が広がりつつある。農作物の収穫量は目に見えて減り、食糧不足に本格的に対策を取らなければならなくなっていた。

広い領域で草原が残るのは、今や、闇の森に覆われた最南部に近い場所しかない。闇に守られたその領域に足を踏み入れるものはなく、手が付けられていないのだから当然だろう。

「……？」

空を見上げて、ラテルネは一瞬、厚い灰色の雲から差し込む陽光の中に、紫色の幕のようなものを見た気がした。森の中の何かが反射したのかも知れない。

「……メッサー殿！」

監視を続けていた兵士の一人が、声を上げる。そこで現実に立ち戻った。

「どうした!」

「う、動いてます!」

「なんだと……! 総員、戦闘配置!!」

ラテルネの指示で、兵士たちは各々武器を取る。ラテルネも自ら剣を抜き、槍を構える兵士たちに頷いて見せる。果たして、あの化け物に武器が通用するのか……悩んでいても、答えは出ない。

遙か遠方で静止していた化け物は、焦れるほどの早さで、時折、立ち止まって全身を震わせながら、それでも着実に歩を進めていた。ラテルネは固唾を呑んで、攻撃の合図を掛ける瞬間を見定める。高台に待機する一小隊から、肉眼でその異形を確認できるほどに距離が狭まると、化け物は急に足を止めた。こちらの気配に気付いて、戸惑っているのか。人らしい感性があるとは思えないが、このまま森に逃げ帰ってくれるなら、それが一番いいのかも知れない。

「ラテルネ、来るぞ!」

立ち止まり、身体を何度か大きく身体を痙攣させていた化け物が、大きく反り返って空を仰いだようだった。瞬間、ザハトの怒号が飛び、ラテルネは瞬時に身を屈める。その頭上を、物凄い速さで、鞭のような一本の線が通り過ぎる。フードを掠め、炎のように揺らめく、赤緑色の髪が零れた。焼け焦げるような、じゅわ、という音がした。

「な  
」

鞭のようなそれは、化け物が伸ばした腕、だった。人型をしていても、化け物である。構造まで人と同じと思っていたのは間違いだっただろう。

「う、わ、あああッ!！」

戸惑うような悲鳴が上がる。振り返れば、化け物の腕は、ラテルネの後ろにいた兵士の腹部を貫通していた。それなのに、血は流れていない、奇妙な光景。兵士は恐怖に涙を溜め、驚愕の表情を浮かべ、何か言おうと口を開いて　消える。目の前で、一人の人間が、瞬時に塵と化した。原素に還ることも許されず、ただの塵へと　。

「くっ!！」

伸ばされた腕に斬り付けたラテルネの剣が、刃から塵となる。先程触れられたフードも、その部分だけが欠けていた。

「ひ……!！」

目にしたおぞましい現実に、恐怖が追い付く。兵士たちは息を飲み、青褪めて、じりじりと後ろに下がりつつある。恐怖に支配され、取り乱さなかったのは、さすが炎の如く勇敢と名高いシュナプス騎士団の兵士たちだ。

「……火矢を持って!　できるだけ奴に近付くな!！」

既に役目を果たさなくなった剣を投げ捨て、ラテルネは後退の指示を出した。触れたもの全てを塵化してしまうのだとしたら、武器など通用しない。兵士たちが慌てて弓を持ち、油を染み込ませた矢の先に火を点けていく。シュナプスは火の原素を司る一族。完全な術となれば話は別だが、火種程度なら、子供でも操ることができる。しかし、続いた雨のせいで、火の点きが悪い。

化け物は伸ばした腕を元に戻し、再び痙攣を始めた。第二弾が飛んでくるのは、時間の問題だ。

「我が原素を解せよ」

ラテルネは口の中で呟き、指先を化け物へと向けた。その指に緑色の炎が灯り、緋色の文字が舞い躍る。

シユナプスにおける騎士は、素術を扱えることが条件の一つだ。種族が生まれながらに持ち合わせる原素を、特殊な言語と精神力により増幅させ、力として操る術を《素術》と呼ぶ。その威力は、火種とは比にならない。習得には並々ならぬ勉強と修練が必要だが、ラテルネは、この素術の扱いに長けていたからこそ、騎士を拝命できた。

「ラテルネ！」

「効くかどうか分かりませんが……武器も通用しないのであれば、これしか！」

ザハトが素術を苦手としているのは、騎士団では周知の事実である。ならば自分しかないのと、ラテルネは一步前に踏み出す。緋色の文字、火の原素を示す古代語が円を描き、陣となって火の原素を強ちに再構成していく。

ラテルネが素術を展開すると、化け物は痙攣を止め、顔の部分だけを向けた。目はないのに、見られている気がする。

「放て、《赤銅の縛》！」

叫ぶと同時に、文字が炎に包まれて消える。そして、緋色の余韻が集い、一本の赤く燃え滾る鎖を紡ぎ出す。鎖は真っ直ぐに化け物へと襲い掛かり、腕ごと身体を捕らえる。

「素術で生み出したものは、塵化できないようですね……」

「うむ……」

炎の鎖は、触れたものを焼き尽くす温度を保っている。普通なら燃え上がるところだが、化け物の動きを封じるだけで、火の点く様子は一向に見られない。やはり、人とは異なる生き物なのだろう。

「応援を要請しましょう。素術であれば対抗できるかも知れません」  
「いや……待て、ラテルネ」

伝令を呼ぼうとしたラテルネを、ザハトは片手で制する。動きを止めた化け物は、ぶるぶると小刻みに震えていた。

「なにやら様子が………ッ？」

みしりと音を立てて、化け物を捕らえていた鎖が砕け散った。破片は原素を構成する文字に戻り、空中で霧散する。

「バカな……素術も効かないというのか!？」

歯噛みするラテルネは、次の瞬間、身の毛もよだつ咆哮を聞いた。化け物が上げたであろうそれは、声ではなくて、ただの雑音だった。鼓膜が震え、身体の内側から引き裂かれそうな嫌悪感が沸いてくる。ラテルネはたまらず身体を折り、口元を押さえた。兵士たちの中には、耐え切れずに倒れるものも見られる。

「なんだ……何なんだ、あれは!」

「奴は、儂らが思っているよりも遥かに厄介な代物のようじゃ。だが、このまま野放しにする訳にもいかん……」

倒れはしないものの、ザハトも表情を歪ませていた。血流が急激

に悪くなり、寒気と震えが襲う。軽く眩暈も起きている。呼吸を繰り返しても、空気が肺に届かないかのように、息が苦しい。あの化け物の《声》を耳にしたせいだろう。どんな原素を元にした術か分からないが、身体機能を低下させる効果があるようだ。冷や汗が流れて止まらない。

「っ！」

化け物は、鞭のようにしなる腕を振り回し、歩を進める。本体の動きは遅いようだが、あの伸びる腕は厄介だ。防ごうにも、触れば塵になってしまう。ざり、とラテルネの足元が抉られる。草も、土すら塵となって、歪な跡を残す。そして、原素が塵になる瞬間のじゅわ、というおぞましい音。

「ラテルネ、退け！」

「しかし、私が退いては……！」

「おぬし一人では いや、今は誰も奴を止められぬ。ここは退け！」

任を放棄するよう後味が悪いが、ザハトの言つとおり、あの化け物を止める術は見当たらない。

「……っ、我が原素を解せよ！」

ならばせめて足止めをと、ラテルネは再び素術を展開させる。化け物は、やはりラテルネに顔を向け、全身を震わせていた。

「……まさか」

術を解いて、ラテルネは走り出した。隊から外れ、化け物と充分

距離を取りながら回り込む。そして、もう一度、素術を展開した。

化け物が、向きを変える。

「やはり……！ ザハト様、私が奴の注意を引き付けます。兵を連れて退いてください！」

「おぬし、何を!?」

「奴は素術に反応するようです。このまま森まで誘き寄せられれば、時間が稼げるでしょう。今見たことを、侯爵に……お願いします！」

ザハトが止める間もなく、ラテルネは森へ向かって走る。それを、化け物がゆったりとした足取りで追った。

「ラテルネ!!」

雨は、いつの間にか完全に上がっていた。

## 消えた神話 前編

たとえ、我らが悪意なき狂気に滅ぼされようとも、我らが素は汝が内に。

よって、我々は命を賭し、ここに王国を築く。

【ティルゲンの神話―始まりの章より―】

「ロイエ・フェアライト！ 貴様、アレを何とかしろッ！」

黒髪に碧眼、ややキツそうな目が印象的な少年が、激しく机を叩く。その席に座って本を読んでいたロイエは、思わず猫背を正して少年を見上げた。同い年で同じ教室、よく知った顔だ。

「今日は何したんだ、イギアさん……」

ロイエは少年を見上げたまま、独白のように呟く。内容は聞かなくても、だいたい想像が付いた。「アレ」が何を指しているのか、なぜこのクラスメートが激昂しているのか、それをなぜ自分に言ってくるのか。その原因は、ロイエの幼馴染みだからに他ならない。

ロイエ・フェアライトの生活に、平穏という文字はない。国民全員がほぼ顔見知りなこの国でも、国王や大臣に次いで、国家規模で有名な幼馴染みがいるからだ。しかしそれは、決して良い意味での有名ではなかった。ロイエの幼馴染みのイギア・ラーゼンは、とに



かく問題を起こさせたら世界一というぐらいに、次から次へと災難を引き連れてやってくる。災難というか、本人が引き起こしているのだから、正しく言えば人災なのだろう。

さらに問題なのが、本人は悪いことをしたという自覚がないことだ。自覚がないためか、何を言っても奇行を改善するには至らず、結果として、イギアの保護者代わりであるロイエに苦情が舞い込んでくる。ただ、家が近所で歳が近いというだけで、ロイエはイギアの尻拭いをさせられることになってしまった。物心ついたときにはもう、謝罪の文句だけは完璧に会得していたような気がする。

しかし、一番悲しいのは、そんな幼馴染みを持ってしまったために、大抵のことには驚かなくなってしまったことだった。お陰で最近、ロイエに対する視線の半数以上が、同情から奇異なものを見る目が変わってきた。イギアと一緒にしないで欲しいと、声を大にして言いたいところだが、残念ながら彼はそれほど肝が据わっていないわけではない。物事を冷静に受け止められるだけで、基本的に小心中な彼は、常に巻き込まれるだけ巻き込まれ、事態を收拾するために走り回る毎日だ。たぶん、今日もそうなるだろう。

どうやら、そんなイギアの標的になってしまったらしいクラスメイトは、物凄い勢いで、彼女の素行に対する苦情を捲し立てている。「普通に話してたかと思ったら、急に人の服を剥いだのだ、あの小娘がッ！ 恥というものを知らんのか！」

同級のグランツ・フリーレンは、大臣を父に持ち、家柄よし、頭脳明晰、おまけに顔もいいという、羨ましい境遇の持ち主だ。性格は少し傲慢な部分も見られるが、文句のない才色兼備。そのため、特に女子からの人気が高い。

よく見れば、彼の学校指定のコートはよれよれで、微妙に布地が伸びている。自慢の黒髪は乱れ、目を血走らせながら肩で息をする姿は、哀れというか少し面白い。このグランツが、こうまで取り乱

すほどの恐怖だったのだろう。公衆の面前で、いきなり服を脱がされそうになるなんて、普通は想像もしないし、やろうとも思わないのだから、無理もない話だ。

しかし、そんな常識など、イギアの本能の前では無意味だった。動機はどうであれ、グランツを脱がしてみたいと思っただが最後、次の瞬間には躊躇せず行動している。グランツのよれよれのコートは、イギアに取られまいと戦った形跡なのだろう。あのイギアから死守したという点において、称賛されるべき功績だと、ロイエは思った。

「それは大変だったね、グランツ。でも、あのイギアさんに襲われて、それだけの被害で済んだのはさすがだなあ」

ちなみに、イギアが服を脱がせるなどの迷惑行為に走るのは、男女問わず美形限定である。最近、グランツの被害率が高いのは、気に入られている証だ。迷惑にしなければならない好意もあるものだ。

「全力で抵抗したに決まっている！ あの小娘、どこにあんな力があるんだか……！」

忌々しく舌打ちするグランツ。イギアは同じ年頃の少女に比べると、非常に小柄だ。その小ささから、イギアは常に三〜五歳ほど年齢が下に見られる。十七歳と言っても、初対面でそれを信じられる人は少ない。黙って大人しくしていれば、小さくて可愛い少女なのだ。確かに腕力はないが、その体格を生かした素早さは学内一を誇るし、筋力を効率的に使うため、見かけとは想像もつかない馬力を発揮する。外見で騙され、侮っていると、グランツのように、予想もつかない強襲に遭う。

「あのような蛮行、許されていないものか！ そもそも、貴様の躰がなっていないせいだぞ、ロイエ・フェアラート！」

怒りの矛先が変わってきたようだが、これもいつものことだ。イギアの被害に遭うことが多いせいか、ただでさえ、ロイエはグラウンツに敵視されている。幼馴染み家の教育方針に関わった記憶はないが、ロイエは眉を八の字にして、ひたすら「すみません」と「ごめんなさい」を繰り返した。相手が興奮している状態では、反論する方が逆効果だと、今までの経験から学んだことだ。

眉を八の字にして、適当に相槌を挟みながら、ロイエは紫色の空を見上げるのだった。

「ロイエちゃん、空って何色なんだろうねー」

「は……？ 見ての通り、今日も紫色してるじゃないか。それよりイギアさん、今日は、ヴィヒトさんに襲い掛かったんだって？ 配達中のパンが全部ダメになったって、怒ってたよ……」

学校の帰り道。何を考えたのか、イギアは突然持っていた鞆を投げ捨て、木によじ登り始めた。彼女がそうした突発的な行動に出るのは慣れている。大方、フルフトが目当てだろう。ロイエの予想通り、イギアは枝に生った緑色の実をもぎ取り、幹に腰かけたまま頬張っていた。十幼年幼馴染みをやっつけて、ようやく気付いたことだが、どうやらイギアは自分の欲求に正直なだけのようだ。今、目についたフルフトの実が食べたいから、木に登った。シンプルな答えである。落ちたら危ない、枝が折れたらどうしよう、などという考えは、きつとイギアの頭の中のどこを探しても見つからないだろう。とにかく、思い立ったら、人の迷惑も省みずに行動してしまう。しかし、迷惑をかけていることは自覚しているらしく、散々やりたいうようにやっつてから、胸を張って謝罪されたことが何度かある。その意思が本当にあるのか、微妙な態度だが。

イギアに襲われたパン屋のヴィヒトからの苦情は、やはりロイエ

の元に届いている。恐らく、見かけたから抱き付いただけだとは思  
うが、イギアには手加減というものがない。物凄い勢いで走ってき  
て、そのままの速度で飛び付いたなら、それは襲撃に等しい。その  
辺りは、ご近所で、イギアとロイエを小さい頃から知っているヴェ  
ヒトにも分かっているが、売り物をダメにされ、さすがに文句の一  
つでも言いたくなつたのだろう。

「えー？ 紫って、見たまんまだしー」

「そりゃあ……どこからどう見ても、紫色だからね」

「だからー。こっち側じゃなくて、向こう側から見たら、ひよつと  
すると違う色してるかもですよ？」

イギアは目を細め、空を仰ぐ。

雷に打たれたことはないが、ロイエは似たような衝撃を覚えた。  
その言葉で、自分たちが檻の中にいるのだと、改めて気付かされた。  
所詮、檻の中にいる自分たちは、その外側のことなど何も分からな  
いのだ。ここから見える空が薄紫色をしていても、それが外の世界  
も同じだなんて、この王国の誰にも言えやしない。確かめることが  
できないだけで、それはただの空想ではなく、現実味を帯びた想像  
になる。

「あ、でも檻は透明っぽいから、紫に近い色だね、きつと！」

「……………向こう側……………」

「青とか……意外とフルフトみたいに緑だったりして！ うーん、  
一度見てみたいなー」

イギアの明るい声と、フルフトの実を齧るしよりしよと言つ音  
が耳に届いて、素通りしていく。ロイエは口の中で、何度も「向こ  
う側」という言葉を繰り返した。

「う？　ロイエちゃん、どしたの？」

急に大人しくなって、ぶつぶつと呟くロイエを心配したのか、イギアは木から飛び降りて、ロイエの顔を下から覗き込む。口の周りが、フルフトの汁でべたべただ。

「うん……僕も見てみたいよ、向こう側」

既に条件反射で手拭いを取り出し、イギアの口の周りを拭く。ロイエでなくても、イギアには世話を焼きたくなる何かがあるようだ。外見の幼さがそうさせるのかも知れない。年頃の少女とは思えない、恥じらいの欠片も見当たらない言動も手伝っている。締まりのない笑顔で礼を言う幼馴染みを見ながら、ロイエは深く考え込む。

ロイエとイギアは、一歳違いの学生である。彼らが暮らす王国では、ある程度の年齢まで学校に通うことを推奨されている。狭い王国には、学校は一つしかなく、二人が通うティルゲン神学校は、その名のとおり、王国設立の経緯が記された『ティルゲンの神話』を学ぶためのものだ。王国の基礎は、全てこの神話に書かれていると言っても過言ではない。既に失われた文字で書かれた神話は、現在でも解読が進められているが、原書の保存状態が悪く、その大半は未解読のままだという。

よって、この国のものは、誰も知らない。《デシヴィアの檻》に囲まれたこの国の外に、どんな世界が広がっているのか。

第三者の視点で書かれたであろう、その神話が黙して語らない謎を解明することは、国民の総意だ。子供たちは幼い頃から神話を教えられ、その命題と共に生きていく。限られた国土で生きるティルゲン王国は、絶えず一つの問題に直面しているからだ。

資源不足。山も川も存在し、動植物にも恵まれた土地ではあるが、増える人口に供給が追いつかなくなる時が、必ず来るだろう。《檻》という仰々しい名ではあるが、水も、風も、鳥すらも通すことが

できるその檻は、ただ、人だけが拒絶される。檻自身が、意思を持って、選別しているかのように。

ティルゲン王国は、自分たちを外敵から守る檻に感謝し、同時に破壊することを望んでいる。破壊までしなくても、とにかく外との交流が必要なのだ。仮に、外の世界が自分たちを優遇してくれなくても、このまま檻の中で、緩慢な死を迎えることだけは避けたい。そして、その解決策は、ティルゲンの神話に隠されている。

ティルゲンの神話には、二つの戦いが記されている。一つは《悪意なき原思》、もう一つは《悪意なき狂気》。神話を記した第三者というのは、ティルゲン王国の始祖ではなく、彼らと共に戦った何者か、である。彼らは協力してこの二つのと戦い、一つは勝利を収め、一つの結末は知れたとおりだ。始祖たちは戦いに敗れたのか、《デシヴィアの檻》を生み出し、逃げるように世界を分断した。デシヴィアというのは、ティルゲン王国に住む一族の呼称で、このことから、デシヴィアの檻は、デシヴィアを救うために造られたものと考えられている。そして、その檻を生み出すために、デシヴィアに協力していた何者かは命を落とした。

《よって、我々は命を賭し、ここに王国を築く》

ティルゲン王国を現す紋章には、必ずその一文が記されている。王国が、尊い犠牲の元に成り立っていることを忘れないための自戒を含めて。

ただ、デシヴィアとその協力者が戦っていた二つの敵の、そのどちらにも《悪意が存在していない》という点が、希望でもある。元からそういう一族なのか、基本的に暢気な思考のデシヴィアは、だからこそ、檻を壊すことに心血を注いで来た。外の世界との交流を夢見て。

しかし、千六百年経った今も、檻を破壊する手段は得られていない。外の世界が存在するということを、夢物語だと思っには充分過

ぎる時間だ。神話と名の付くように、とうに滅びた神々の物語だと諦めに似た感傷を抱いて、それでも神話に縋るしかない。

そんな国に、生まれてからずっと暮らしていれば、なんの疑問も抱かなくなる。外の世界に憧れ、そして同時に諦めている。ロイエも例外ではなかった。

イギアの、その言葉を聞くまでは。

「でしょ？ 向こう側って、フルフトいっぱい生ってるかなー」

イギアの頭の中では、檻に隔たれた《こちら側》と、その《向こう側》でしかない。それは、一つに繋がった世界であり、ただ、檻という壁によって分けられているだけ。そんな当たり前のことを、しかし、この国の誰もが忘れていたことを、今更のように認識する。

「沢山生ってるよ、きっと」

イギアは、大好物のフルフトを腹いっぱい食べただけだと分かっている、声が震えるのを押さえられない。問題ばかり起こす幼馴染みの、こういうところが最大の魅力であることを、ロイエは知っていた。国中に名の知れ渡る問題児は、同時に、国中の人から愛されている。自分に素直であるように、人に対しても同様であること。あるがままに受け入れてしまえること。そして、その視野の広さは、狭い一国に収まらない。この自由奔放な幼馴染みは、長く檻に捕らわれたことで自然と染み付いたデシヴィアの悲壮すら、軽々と飛び越えてしまう。

「僕も見たい 《向こう側》の空を」

切なる想いを込めて繰り返し、ロイエは紫色の空を仰いだ。

ロイエが真剣に神話学に取り組み、学者を目指すようになったの

は、この瞬間　　二年前の、ことだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7179z/>

---

デシヴィアの檻

2011年12月25日17時50分発行